

第6期 第8回創発セミナー

「感謝の集い」報告

公益財団法人 大隅基礎科学創成財団

理事 大谷 清

大隅基礎科学創成財団は2023年7月24日午後5時から、東京・神田の学士会館で第6期「感謝の集い」（オンライン併用）を開きました。

財団を支援してくださっている個人、団体、企業の皆様をお招きして大隅良典理事長がお礼と過去1年間の活動を報告、続いて飯田秀利財団理事の司会で東山哲也東大大学院教授による講演（「第8回創発セミナー」のコーナーでyou tube公開）、助成を受けた研究者や財団アドバイザーからのメッセージが寄せられた後、交流会に移り、会場に約50人、オンライン参加者が約80人、合わせて約130人の方々の参加を得て午後8時過ぎ、和やかな雰囲気の中に閉会しました。以下に会の概略を報告いたします。

1. 財団の活動報告

大隅基礎科学創成財団 理事長 大隅良典

今期（第6期：2022年8月—2023年7月）もおかげさまでほぼ1億円の寄付を得て研究助成などの活動を予定通り実施している。企業会員は若干、減少気味だが、個人寄付は件数、金額ともに着実に増え、定着しつつある。

第6期の研究助成は11人、所属も大都市に集中することなく全国の大学のユニークな研究テーマを追求する研究者に広がり、財団としても励みになっている。過去6年間に助成した研究者の合計は63人、金額は3億円になった。

いくつかの活動の中から財団の新しい活動として微生物コンソーシアムを紹介したい。微生物研究は日本の伝統ある研究分野であるにもかかわらず、基礎研究が先細り気味にあった。このためアカデミアと企業の研究者からなるコンソーシアムを立ち上げ、現在、15社の企業の参加を得て月1回のペースで研究会を開いている。その中から微生物の持つプラスミドのデータベースを構築する事業が、企業の支援のもとに始まった。日本初の国際的なデータベース作りで、3年後に実を結ぶことを期待している。



2. 講演

「花の中での秘めやかな受精：映像で見る植物の本質」

東山哲也 東京大学大学院理学研究科 教授

東山教授の講演は、YouTubeチャンネルで公開しています。以下よりご覧ください。

<https://youtu.be/aDampSBHs8U>



「花の中での秘めやかな受精：映像で見る植物の本質」と題した創発セミナーを開きました。東山教授は花の内部で起きる植物の受精を初めて映像で捉え、140年もの間、謎とされていた「花粉管誘引物質」を発見、これを「ルアー（LURE）」と命名、その後の研究成果を含め学会誌の「Science」や「Nature」の表紙を飾る論文を発表、2018年に「中日文化賞」、2019年に「朝日賞」などを受賞、有性生殖の仕組みの分野で世界をリードする研究者として知られています。

東山哲也氏の略歴：1971年山形県鶴岡市生まれ、鶴岡南高校を経て東京大学理学部を1994年に卒業、99年同大学院で博士号（理学）を取得、東大助手を経て2007年名古屋大学教授、2019年から東大大学院教授。（理事 大谷 清）

3. 助成研究者からのメッセージ

兵庫県立大学 特任教授 河野憲二
(第4期研究助成者)



大隅財団の助成申請書には他の財団にはないユニークな項目がある。「基礎科学への姿勢を述べよ」、「特殊事情のある場合はそれを書け」で、私の場合は定年を迎えたものの研究を続けたいとの思いを強く持っていたので、このことを「特殊事情」として記入した。年齢不問の助成は大隅財団の極めてユニークな特徴で、私には大変ありがたかった。

私は今から60年も前の小学生の頃、「何故だろう、何故かしら」という本に出会ったのが研究者の道に進んだきっかけになった。知的欲求を文化の一つとして社会の理解を広げようという財団の考え方は非常に大事だ。今後の大隅財団の発展を願っている。

島根大学医学部医学科 准教授 加藤太陽
(第6期研究助成者)



私の研究材料の酵母は非常にパワフルなモデル生物で、少し遺伝子を改変するだけで新しい世界が広がり、深く研究に入っていける。酵母でわかったことは真核生物全体に適用できるのに、問題は「役に立った」「応用された」が見えにくい点で、そのために研究資金に恵まれない。

昨年6月に新しい研究室をあてがわれたものの、環境整備するお金が乏しく、藁にもすがる思いで大隅財団に応募したところ、助成を受けることができ、そのことが学部内で大変評価されて助教を1人つけてもらった上に医学部医学生2人が研究室に参加してくれた。研究を進めよ、と大隅財団に背中を押されたものと感謝している。

財団アドバイザーからの応援メッセージ

サーモフィッシャーサイエンティフィック株式会社
代表取締役 室田博夫



大隅財団発足以来、6年にわたって支援をさせていただいているが、この10年間で私どもの業界で大変、情けない思いをしたことが2回あった。1回目はすでにGDPでは世界2位となっていた中国に2013年、当時日本の代表をしていた会社内での売り上げでも抜かれたとき。グループの会議で中国の代表が「日本を抜いた」と誇らしげに語ったのを思い出す。

2回目は最近のことで、半導体とバイオ医薬で躍進する韓国に追い上げられていることだ。今日の低成長とインフレが続けば2030年には一人当たりGDPで日本は韓国に抜かれてしまう。20-30代の日本の若者世代には将来に希望を持ってないと考えている人が多数いる。

打つ手としては人口を増やすことか、生産性を上げることだ。人口を急には増やせないとすれば、1人あたりの生産性を上げるしかない。その方法は「カイゼン」とイノベーションだ。抜本的なイノベーションは基礎科学・基礎研究からしか生まれ得ないので、大隅財団の基礎研究支援がこれに貢献していくことを願いつつ、今後も財団の支援を微力ながら続けたい。

以上